

米軍資料の検証と『呉海軍刑務所の捕虜 28 人』の氏名の照合

吉田 雄彦
たかよし

1. 『海軍工廠に捕虜二千人説』

1942 年頃から終戦前まで、呉海軍工廠に二千人の捕虜がいて、労働に従事していたという米軍の資料がある。

ニミツツ本土攻撃総司令官の 1945 年 6 月 12 日付の「敵情報報告」によれば「呉には 2,000 人の連合国捕虜が海軍工廠に居るという情報があった。」もっとも、8 月 15 日時点でも 2,000 人の捕虜がいるという情報をもって呉に進駐した第 6 軍の広島地区占領担当の第 10 軍団は、広上陸 10 日後の 10 月 17 日になって、これが誤報だと認めている。

「2,000 人説」は、その後、「誤報」とされたように、いかにも虚構めいている。とはいえる、1942 年 2 月 15 日のシンガポール陥落以後、日本に送られた他都市の捕虜の記録から類推すると、数十人またはそれ以上の規模で連合国捕虜が呉工廠で働いていたとしても不思議ではない。

2. 「海軍工廠で働かされた」オーストラリア人捕虜はいた。

戦後、中国地区を占領した英連邦占領軍 (BCOF) 司令部の教育部長 (1946 年～ 1952 年) であったアーサー・W・ジョン氏も自著の『日本占領史—王冠を戴くものに安らぎはない』(1987 年版) のなかで、呉の連合国捕虜についてふれている。

3. アーサー・ジョン氏による「ヘンダーソンのケース」

ヘンダーソンのケースは、社会の関心と同情を十分に惹き付けるものだった。

ヘンダーソンと日本人女性のロマンスが際立っているのは、ヘンダーソンが、日本軍が強行した、ビルマ・クワイ川の「戦場に架ける橋」の殺人的な建設捕虜であったことだ。

その結果、彼は、一年間失明状態だった。そういう経験をもちながら、彼は戦後、日本占領の任務を志願した。日本への悪意を抱いていたわけではなかった。

妻が妊娠したとき、神道の儀式による結婚の合法性について懸念を抱いたヘンダーソンは、部隊の礼拝堂で結婚式を挙げ直したほうがよいと思った。手続きに従って、部隊長に申し入れをした。彼がオーストラリアのマスコミに語ったところによれば、「私は日本人と結婚したために、また正直に申告したため即刻帰国するよう隊長から告げられ、その鬼の少佐からたっぷりしごかれた。私の逃亡を恐れ二度と妻と会うことも許さなかった」そうだ。

1948 年 3 月、このケースは、オーストラリアのマスコミに発表された。ヘンダーソンは、天皇への直訴をはかったり、日本かオーストラリアで在郷軍人会に支援してもらって妻と元の生活の実現を計画した。公聴会が開かれ、同情は得られたが、それだけだった。

マスコミによるインタビューの際に、呉で結婚生活をしているオーストラリア兵の事情に明るい彼は、「呉のオーストラリア兵で日本式の結婚をして、子どももたくさんつくっている者が多数いるが、軍に報告しないだけだ」と言った。

このことについて、訊ねられたオーストラリアのチャンバー陸軍大臣は、ノーコメントだったが、軍の広報部は、「BCOF の兵士と日本人女性との結婚は禁止されていない」と発表した。ただ、「これを防ぎ止めるあらゆる手段を講じるだけだ」と付け加えた。実際には、BCOF のマル秘の「管理規定第 39 号」(1946 年 9 月) によって結婚は厳禁だった。その

後ハンダーソンは、この結婚の実現を求めて、前後七回も日本へ密入国を重ねた。しかし、七回目には看守の妹が別の男性、アメリカ兵と結婚しているのを知る羽目になったという。1952年になって、オーストラリアの自豪主義がほころび始め、政府の日本人妻の入国禁止もようやく緩んだ。

現地の軍も、結婚希望者は余りいないだろうとかをくくって結婚許可に踏み切った。実際には、軍に隠れて呉で結婚生活をしていたオーストラリア兵が多数いた。基地の町呉にはそれを受け入れるコミュニティがあったのだ。1957年4月の『呉日日』によれば、1952年から57年の間、呉だけで866人が晴れて結婚を申請してようやく日本人妻のオーストラリア入国の許可を取った。

もちろん、ハンダーソンと看守の妹さんも、その中に含まれていなかった。ただ、1965年に出版された毎日新聞呉支局の『ドックは生きている』によれば、看守の妹さんは、その後アメリカ兵と結婚したのではなく、「日本人と再婚して子どもをもうけており、ハンダーソンとの子どもは養子になって平和に暮らしていると何度も手紙で知らせている」。「ハンダーソンがマスコミに言うようにかくれているのではない」という。

4. 1945年6月22日、捕虜2,000人収容の情報があった呉海軍工廠を186機のB-29が1時間にわたって795.8トンの爆弾を投下

ニミツ提督は、6月15日付の工廠爆撃直前の「敵情報報告」に以下の写真を添付して、捕虜収容所と考えられる位置を矢印で示した。

呉工廠は、ニミツ提督の通達の一週間後、6月22日に、186機のB-29によって795.8トンの爆弾を1時間にわたって投下され、屋根面積85%を破壊し、事実上壊滅した。



合衆国太平洋艦隊司令
長官兼太平洋地域総司令官による通達
1945年6月15日付

収容所名：呉
場所：海軍工廠付近と報告あり。

捕虜情報：
人数 2,000人
職務 工廠内作業

呉収容所の位置は、
この地域内の可能性あり

1945年4月12日 第21爆撃群団B-29写真偵察隊 3PR5M135任務撮影

5. 7月1-2日、焼夷弾に最も弱い◎印の照準点に爆撃群団の総努力（2.6平方キロに200トン）を集中せよ

6月22日の呉工廠爆撃10日後の7月1日、壊滅した工廠の「従業員の士気を崩す」ためと称して、呉の「市街地」爆撃、「B-29の作戦 No.240」が行われた。同時に展開された他の3都市と違って呉市を襲ったB-29の第58爆撃団は、部隊の「最善の努力を、焼夷弾に最も弱い地帯の照準点二重マル印に結集するよう命令されていた。ペンタゴンの陸、海軍の「統合目標集団」は後で次のように報告した：

『撃墜された米軍機もあったが、撃墜死を免れた乗組員は、呉の海軍刑務所に拘置され、全員が帰国した。原爆が広島の「爆撃に一番弱い地帯」を目標にしたのと同じやり方であった。

7月1-2日、呉の「焼夷弾に一番弱い地帯」を爆撃したB-29の部隊が結集した『最大の努力』のナパーM 16,681発は焼夷弾だった。それでも捕虜は生き延びることができた。呉の「焼夷弾に一番弱い地帯」の近くに呉海軍の刑務所があった。1945年2月に「統合目標集団が用意した写真のとおりである。

MISSING IN ACTION PILOT AND CREWMEN, detained in Kure Naval Prison:

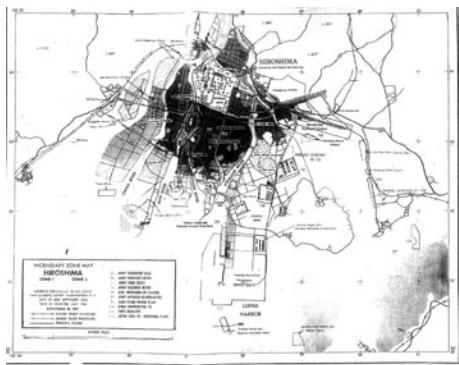
Westmoreland, Talmadge, Ensign Al, USNR; West, Harold Willard, AOM3c V-1 (G) USNR and William Rober Huson, AMR3c V-6 USNR of VBF 17, USS Hornet (CV-12) and Abel William E, Staff Sergeant of 868 B Sq, 494 B Gp, (Lonesome Lady piloted by 2d Lt Cartwright Thomas C) and 8 other American flyers.

Their planes were shot down, but survived the crash and detained in the Naval Prison. They all returned home after the War, having survived American air raid on July 1/2, 1945, which bombed with "Best Effort" by 141 B-29s (16,681 incendiary napalm bombs) targeting the most vulnerable "Incendiary Zone No.1 in Kure in the same manner the Atomic bomb targeted "Fire Zone No.1" in Hiroshima. The "Incendiary Zone No.1 of Kure was close to the area where the Naval Prison was situated, shown in the photo prepared by U.S. Target Information Center.

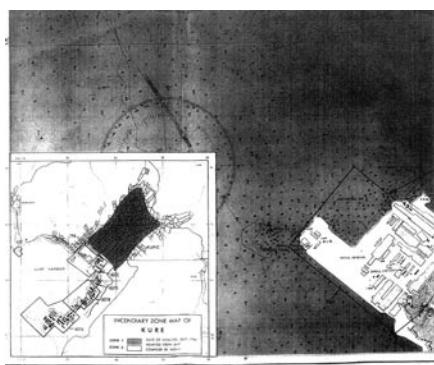


PHOTO 1—Kure City—Northern part of city showing the unusually high degree of housing congestion in the Zone 1 fire area. View has been retouched to obliterate buildings of Kure Naval Prison.

呉海軍刑務所の位置を示す Air Objective Folder KURE-HIRO REGION



広島の焼夷弾に一番弱い地帯



呉の焼夷弾に一番弱い地帯

焼夷弾に特に弱い広島と呉の地帯（ファイア・ゾーン）爆撃計画図（1945年2月）

6. 呉刑務所に少なくとも三人の捕虜がいて、帰国していた！

— 2000 年、そのうちの一人から筆者に E- メール。

一方、敗戦後、10 月 7 日に広に上陸した米 6 軍第 10 軍団の第 7 捕虜回収班は上陸直後、行動を開始した。しかし、担当地域の捕虜はすでに解放され、捕虜収容所は、尾道南の広島第一分所と因島（広島第二分所）の二ヶ所だけであった。

呉工廠の捕虜については、2,000 人説は 10 月 17 日誤報であったと認められた。ヘンダーソン通信兵たちが終戦前工廠で働いていた事実は確かにあった。しかし、われわれがその確証を得たのは、米軍に換わって BCOF が進駐してからである。

鎮守府の呉の捕虜関連の資料が 3 月 19 日の呉沖海戦後の占領軍報告以外残されていないので、その前の呉の捕虜のグループの存在、その規模や解放日についてはまだわかっていない。

「統合目標集団」の資料がマル秘扱いを 30 年後解除されて、90 年代後半「呉の捕虜が全員帰国した」という情報は国会図書館に収録されていたが、人数も名前も分からなかった。

2000 年 9 月になって、1945 年 3 月 19 日に呉湾を攻撃した『ホーネット』機の捕虜 2 名の写真が江田島で 55 年振りに発見された。それが機縁で筆者は、呉刑務所に少なくとも 3 人の『ホーネット』機の捕虜が拘束されていたが、帰国していたことを 3 人のうち 1 人から送られた E- メールで知る。大へんな成果であった。

7. 呉刑務所捕虜名簿入手と「戦闘報告」による名前の照合

また、その前後に、終戦直後、呉刑務所の副長が占領軍に報告した 3 月 19 日から 8 月にかけて拘留した捕虜のかな書きの名簿を入手した。判読困難なものであったが、訊問で許されるかな書き名簿を鎮守府が報告していること、「捕虜取扱い報告」をその後入手するに及んで、これは、30 年前の宇吹資料の広島の捕虜名簿に匹敵するもののように思われた。

そうであることを実証しようとして始めたのが、米兵パイロットの『戦闘報告』と米空母の『戦闘報告』による名前の照合であった。仕上がった照合名簿に、母艦名、部隊名、報告 No. のあるものがその成果である。陸軍機は、B-24 以外の B-29 の、『爆撃任務報告』を見ても、B-29 のロストの機数があるだけだ。仕上がった名簿に一部空欄があるのはそのせいである。陸海軍共戦死者名は公表されているが、捕虜は生存者の場合、個人情報保護法の問題があつて発表されていない。

今回呉刑務所拘留者名簿の名前の確認ができたのは、366 機分のパイロットの『戦闘報告』のおかげであったと自負している。

8. 呉海軍刑務所の捕虜「厚遇説」を否定する終戦直後の戦犯調査の発掘

I, 読売新聞広島 2006 年 2 月 2 日記事「米兵捕虜の名前確認」について

2006 年 1 月末、広島の森重昭氏（広島の被爆捕虜の実相研究の権威者）から電話があった。「呉海軍監獄に拘置されていた米兵捕虜 28 人が無事帰国したことを吉田氏が解明されたのは、画期的なことだ」と気づき、広島で、この事実をマスコミに報道してもよいか、

広島での公開に参加してもらえるか、この2件に関する問合せであった。

だが、これは広島の問題といふよりは呉の捕虜問題だから、呉で公開することを提案し、快諾していただいた。

2月2日、森氏に同伴した読売新聞広島の若いリポーターが呉の捕虜28人の名前確認の公開発表を取材した。

タイトルの『米兵捕虜の名前確認』はさすが秀逸だ。ただ、『米兵捕虜は手厚い待遇を受けていたと見られる』で始まり、「厚遇があり得ない」という吉田の意見を無視した記事は、一方的に森氏の意向を支持したきらいがある。

II、中国新聞広島 2006年7月3日付、「捕虜米兵28人無事帰国」記事について

増田咲子レポーターは「呉海軍捕虜28人全員帰国」の呉公開発表を取材して、森氏の「呉海軍刑務所の『捕虜厚遇説』と全員帰国したのを『呉海軍の捕虜厚遇』のおかげだと決めるのは危険だ」という吉田の意見との落差に「とまどった」。

彼女は取材後、米捕虜に関するGHQ文書分析の専門家福林徹氏に呉海軍刑務所の「厚遇説」に就いて意見を求め、同氏から、「厚遇説」の危険性を示唆されたという。

「更に取材を重ねて記事にしたい」と公開発表のあと言ったこのレポーターのこの記事にたいする読者の反響は大きかった：

(1)、「呉海軍捕虜全員帰国」に疑問を呈する新しい証言
「江田島の兵学校の病院施設で米兵捕虜1名の処分があつたらしい(戦後広島大教授談)という匿名の証言」の発掘もできた。

(2)、「広島の戦争展実行委員会」から中国新聞呉を通じて「平和のための戦争展」で広島市民に「呉の海軍捕虜全員帰国」の発表依頼があり、引き受けた。

(3)、発表後、参加者の婦人から「母が相生橋のたもとで、原爆投下後米兵一人が曝したものになっているのを目撃した。このことと呉の捕虜28人帰国はどう結びつくのか」と質問があった。

「広島の捕虜も呉海軍の捕虜だった」のテーマで、次の機会に説明したいと答えた。

III、朝日新聞広島 2006年10月23日付記事「米兵捕虜の証言発見」について

中国新聞の記事を機縁に、「広島の戦争展実行委員会」主催の「平和のための広島の戦争展」で、「呉の捕虜と広島の捕虜」について発表した。

この発表を朝日新聞中川正美呉支局長が早速取材した。

また、同時期に、呉市史文書課が収集したGHQ資料は、吉田の解説の結果、この資料も呉刑務所の捕虜虐待の戦犯調査書と「虐待された捕虜11人の証言」であることが判明した。その結果、呉海軍刑務所の捕虜厚遇説は勝手な仮説であり、朝日の記事はこの事実のスクープであった。

(呉戦災を記録する会)